

実践報告

保育者・教師を目指す学生によるボランティア活動の教育的効果と課題 ——劇団くれよん活動からの学び——

蘇 珍伊*

Educational Effectiveness and Assignments Concerning Volunteer Experience of Students aiming to become Nursery and Primary School Teachers : Learning From Experience of the Crayon Theater Group

SO Jinyi

要 約

本稿は、2022～2023年度の劇団くれよんの活動を紹介し、保育者・教師を目指す学生によるボランティア活動の教育的効果および今後の課題について明らかにすることを目的とした実践報告である。メンバーを対象としたアンケート調査の結果、教育的効果として、子ども目線で考える姿勢や表現力・伝え方を体験的に学んでいること、協調性・行動力・人間関係の築き方を学んでいることが挙げられる。また、これらを将来、保育者や教師になったときにどのように生かせるのか、具体的なイメージを持てるようになり、それが現在の活動の原動力にもなることが明らかになった。一方で、情報共有・意見交換の改善、役割分担の明確化、運営・管理体制の改善などの課題も浮き彫りになった。これらを解決することによってメンバーのモチベーションの向上を図り、活動の満足度を高めることが今後の課題である。

キーワード：保育者・教師、ボランティア活動、教育的効果

I. はじめに

本稿は、中部大学現代教育学研究所のプロジェクト劇団くれよんの実践活動をまとめた報告である。実際に保育・教育現場で子どもを指導することができる実践力を備えた教員の育成がますます重視されている。中央教育審議会(2006)の「今後の教員養成・免許制度の在り方について(答申)」では、「体験活動やボランティア活動、インターンシップ等の充実」が養成段階でなされるべきこととされており、さらに、中央教育審議会(2015)の「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について(答申)」では、「学生が長期間にわたり継続的に学校現場等で体験的な活動を行うことで、学校現場をよりよく

知ることができ、既存の教育実習と相まって、理論と実践の往還による実践的指導力の基礎の育成に有効である」と述べられている。つまり、養成段階で学生がボランティア活動やインターンシップといった体験的な学びを得ることは、養成教育の質を向上させるために欠かせないものとされている。そのため、多くの教員養成大学では、実習などの実践的な科目のみならず、正課外のボランティア活動などを導入しており、その方法も様々である。

中部大学現代教育学研究所では、保育者・教師を目指す学生の体験的な学びを支えるために、様々なプロジェクトを設けている。その一つが2015年度からスタートした劇団くれよんである。劇団くれよんは、正課外のボランティア活動であり、現代教育学部の幼児教育学科と現代教育学科の学生が主体となって劇づくりや公演活動を行っている。単位化さ

* 中部大学現代教育学部幼児教育学科

れた活動ではないため、学生の自発的参加を原則としており、参加学生は、保育者・教師に必要とされる資質の向上や自己成長を目指すとともに、親子で楽しめる劇を提供することによって地域の子どもや子育て家庭に貢献したいという思いで活動に取り組んでいる。

劇団くれよんは、9年間活動を続けてきたが、目的としている成果が得られているのか、ボランティア活動の教育的効果を検証し、より良い活動を行うためには改善すべき課題を明確にしなければならないと考えられる。

そこで、本稿では、2022～2023年度の劇団くれよんの活動を紹介し、活動をとおして得られた教育的効果および今後の課題について検討することを目的とする。

Ⅱ. 劇団くれよんの活動内容

1. 活動目的および方法

(1) 活動目的

劇団くれよんは、学生が主体となって童話や絵本のお話をもとに子ども向けの劇を作り、大学祭、保育所、幼稚園、小学校等で公演を行っている。劇づくりをとおして、「表現することの楽しさ」を知り、それを子どもたちに伝える実践的活動を展開している。場所・依頼内容によっては、劇を披露するだけではなく、その施設・機関の活動にも積極的に参加し、子どもたちとのふれあいを大切にしている。

劇団くれよんの活動目的は、劇づくりと公演活動をとおして、地域の子ども・保護者や保育・教育機関に貢献するとともに、学生の主体性、課題発見力、表現力、実践力を育成することである。年度別重点目的は、2022年度は、自分たちの表現が子どもたちにどのように伝わるのか、毎回の公演をビデオで記録・分析し、子ども向けの表現について理解を深め、より良い表現活動につなげていくことであり、2023年度は、2022年度に公演先として新しく開拓した「小学校」や「社会福祉協議会」との連携をより深めることと、同じ劇でも幅広い年齢の子どもに合わせて工夫を凝らして対応することである。

(2) 活動方法および流れ

劇団くれよんの活動は、大きく劇づくりと、公演の二本柱となっている。劇づくりは、学内で行う活動であり、週1回（毎週木曜日17～19時）の活動を行っており、年間1～2つの劇を作っている。公演（リハーサルを含む）は、学内外で行う活動であり、年間5～6回上演をしている。活動の流れは、公演場所の確保→演目（台本）決め→配役（演出、役者、裏方など）→稽古および大道具・小道具等の制作→公演場所の事前訪問→公開リハーサル→公演本番→反省会の順で行われる。

まず、公演場所を確保する。幼児を対象とする場合は、保育園、子育て支援センターを中心に、小学生を対象とする場合は、小学校、児童館などを中心に選定する。次にメンバーにいくつかの演目（台本）を推薦してもらい、検討会を経て決める。演目（台本）を決める際には、対象年齢に相応しいか、内容が限られた時間・空間の中で表現できるのか、子どもに与える影響などを検討して決める。次に配役については、演出、役者、裏方に分け、役割を分担するが、裏方は、さらに音響、衣装、幕や小道具の制作係に分かれる。次に稽古に励み、音響や舞台の幕、小道具等を制作しながら劇を作っていく。公演の前には、公演場所を事前訪問し、舞台および観客席を確認し、点検する。公演直前になると、現代教育学部学生と教員を対象に公開リハーサルを行う。公開リハーサルをビデオで記録するとともに参加された人からの意見等を参考に劇を修正・改善していく。最後に公演後、公演本番の映像を持って反省会を行い、活動の成果および課題をまとめ、次の活動につなげていく。

2. 2022～2023年度の活動実績

(1) メンバー数

メンバー数と学科、学年別の内訳を表1に示す。2022年度の活動に参加したメンバーは、22名であり、2023年度の活動に参加したメンバーは、33名である。2022年度は幼児教育学科の学生が77.3%で多かったが、2023年度は現代教育学科の学生が54.5%で過半数を占めている。

表 1 劇団くれよんのメンバー数

年度	学科	1 年生	2 年生	3 年生	4 年生	合計 (%)
2022 年度 22 名*	幼児教育学科	3	7	3	4	17 (77.3%)
	現代教育学科	1	1	2	0	4 (18.2%)
2023 年度 33 名	幼児教育学科	3	3	7	2	15 (45.5%)
	現代教育学科	14	1	2	1	18 (54.5%)

※ 2022 年度のメンバーは現代教育学部 21 名の他に、他学部・学科 1 名が所属し、22 名である。

(2) 劇づくり

2022 年度の演目は「わんぱくだんのたからじま」であり、2023 年度の演目は「シンデレラ」である。「わんぱくだんのたからじま」は、出版社「ひさかたチャイルド」の絵本をもとにしているため、まず、「著作物利用許可申請」を行い、著作権者からの許諾を得て利用した。演目が決まると、劇団くれよんのメンバーが演出・役者・裏方（音響、幕・小道具制作）班に分かれ役割を分担し、まずそれぞれ作業を

行い、ある程度の準備が揃った段階から一緒に稽古を行う。毎回、活動報告を行い、各班の役割、進捗状況、情報の共有を図りながら活動をしている。

(3) 2022 ～ 2023 年度の公演活動の実績

劇団くれよんの 2022 ～ 2023 年度の公演回数・参加者数を表 2 に示す。2022 年度は、公開リハーサル 2 回、公演 4 回を行い、参加者数は、延べ 415 名である。2023 年度は、公開リハーサル 1 回、公演 6 回

表 2 劇団くれよんの 2022 ～ 2023 年度の公演回数・参加者数

公演日程・場所		子ども	保護者	職員・学生等	メンバー	教員	合計
2022 年度	10 月 27 日（木）公開リハーサル① 中部大学 70 号館多目的ホール	—	—	8	20	4	32
	11 月 6 日（日） 中部大学大学祭こどもまつり	34	54	5	20	1	114
	2 月 20 日（月）公開リハーサル② 中部大学 70 号館多目的ホール	—	—	1	20	1	22
	2 月 21 日（火） A 小学校放課後総合プラン	35	—	12	17	1	65
	3 月 4 日（土） B 社会福祉協議会親子お楽しみ会	12	10	6	15	1	44
	3 月 4 日（土） C 子育て子育て総合支援館	67	46	9	15	1	138
2023 年度	10 月 19 日（木）公開リハーサル 中部大学 70 号館多目的ホール	—	—	8	28	2	38
	11 月 3 日（金）（2 回） 中部大学大学祭こどもまつり	75	126	5	28	1	235
	11 月 4 日（土） C 子育て子育て総合支援館	40	65	11	19	1	136
	12 月 16 日（土） B 社会福祉協議会親子お楽しみ会	20	26	5	19	1	71
	12 月 23 日（土） D 小学校クリスマス会	85	10	12	20	1	128
	2 月 13 日（火） A 小学校放課後総合プラン	32	—	7	16	1	56

を行い、参加者数は、延べ664名である。2022年度は、コロナ禍の影響により、公演に様々な制約があり、控え目の公演活動になったが、2023年度は、

公演場所・回数および参加者数が増えており、より活発に公演活動を行うことができたと評価できる。公演の様子を写真1と写真2⁽¹⁾に示す。



「わんぱくだんのたからじま」 始まるよ！



公園の砂場でわんぱくだんの冒険遊び



たからじまへ出発！



ジャングルの中から鳴き声が聞こえる？

写真1 わんぱくだんのたからじまの公演様子



みんなで魔法をかけて！



シンデレラ！ 早く掃除をしろ。



私たちも王子様と踊りたいなあ～



入る？ 入らない！

写真2 シンデレラの公演様子

Ⅲ. 劇団くれよん活動の教育的効果と課題

劇団くれよんの活動をとおしてメンバーがどのような学びを得ているのか、また、どのような教育的効果があり、課題を抱えているのかを明らかにするために、アンケート調査を行った。

1. アンケート調査の概要

2022～2023年度のアンケート調査方法を表3に示す。調査対象は、劇団くれよんのメンバーであり、調査期間は、2023年2月14日（火）～16日（木）、2024年2月7日（水）～14日（水）である。調査方法は、Google フォームを用いたウェブ調査であり、依頼文と二次元コードおよびURLをメールにて転送し、ウェブ上で回答するよう協力を求めた。調査内容は、活動参加のきっかけ・目的、活動をとおして学んだこと・成長、今後の活動課題等であ

り、有効回答率は、2022年度が回答数17件、回答率77.3%であり、2023年度が回答数26件、回答率78.8%である。分析方法としては、SPSSを用いた単純集計および自由記述の内容分析を行った。倫理的配慮については、表3のどおりである。

2. アンケート調査の結果および考察

(1) 調査対象者の基本属性

調査対象者の基本属性を表4に示す。

メンバー数でも述べたように、回答者においても2022年度は幼児教育学科が76.5%で多く、2023年度は現代教育学科が53.8%が多い。学年については、2022年度は2年生が41.2%で最も多く、2023年度は1年生が57.7%で最も多い。参加のきっかけは、「友人や教員からの誘い」が最も多く、次に「団員募集チラシ」である。毎年新入生オリエンテーションにおいて「団員募集チラシ」を配付し、宣伝活動を行っ

表3 調査方法

項目	2022 年度	2023 年度
調査対象	劇団くれよんのメンバー 22 名	劇団くれよんのメンバー 33 名
調査期間	2023 年 2 月 14 日（火）～16 日（木）	2024 年 2 月 7 日（水）～14 日（水）
調査方法	Google フォーム（二次元コードおよび URL）を用いたウェブ調査	
調査内容	活動参加のきっかけ・目的、活動をとおして学んだこと・成長、今後の活動課題等	
有効回答率	回答数 17 件、回答率 77.3%	回答数 26 件、回答率 78.8%
分析方法	SPSS を用いた単純集計、自由記述の分析	
倫理的配慮	依頼文にて、個人が特定できないように処理を行い、プライバシーの保護を徹底すること、協力の意志のある人のみウェブ上で自由に回答できることを説明した上で調査協力を求めた。	

表4 調査対象者の基本属性

項目	カテゴリー	2022 年度	2023 年度
所属学科	幼児教育学科	13 名 76.5%	12 名 46.2%
	現代教育学科	14 名 17.6%	14 名 53.8%
	他学科	1 名 5.9%	0 名 0.0%
学年	1 年生	3 名 17.6%	15 名 57.7%
	2 年生	7 名 41.2%	4 名 15.4%
	3 年生	2 名 11.8%	7 名 26.9%
	4 年生	5 名 29.4%	0 名 0.0%
性別	女子	11 名 64.7%	14 名 53.8%
	男子	6 名 35.3%	12 名 46.2%
参加の きっかけ	団員募集チラシ	6 名 35.3%	9 名 34.6%
	SNS（Instagram 等）	1 名 5.9%	2 名 7.7%
	友人や教員からの誘い	10 名 58.8%	15 名 57.7%

ているが、これによる参加は3割強に止まっており、半数以上のメンバーが周りからの誘いが決め手となっていることがわかる。

(2) 活動に参加する理由（主な活動目的）

活動に参加する理由（主な活動目的）を表5に示す。メンバーは、それぞれが色々な思いで劇団くれよんの活動に参加している。選択肢の項目はすべてが劇団くれよんの活動目的に当たるが、2年間共通して回答が多かった項目は、「実践力を身につけるため」と「子どもや保護者とのかかわる機会を持つため」である。保育者・教員養成課程に現場実習があるものの、それだけでは実践力や子どもと直接かかわる機会が不十分であると考え、ボランティア活動をとおして補いたいと思っていることがうかがえる。また、「表現力を身につけるため」については、2022年度は最も多かったが、2023年度は3番目となった。その理由として、前述した調査対象者の基本属性が関係しており、2022年度の回答者の7割以上が幼児教育学科であることから、保育者を目指す人の方が表現力の向上をもっと意識している結果であると考えられる。

(3) 活動の満足度

活動の満足度を表6に示す。劇団くれよんの活動の満足度について、「非常に満足している」と「まあまあ満足している」を合わせると、2022年度は82%で満足度が非常に高いが、2023年度は62%で半数以上の人が満足していることがうかがえる。一方、「どちらともいえない」～「ほとんど満足していない」を合わせると、2022年度は18%であることに對して、2023年度は38%であり、4割弱の人は、あまり満足していない現状もうかがえる。2022

年度と比べると、2023年度の活動の満足度が下がっている。その原因を探るために、学年ごとの満足度を確認すると、1年生回答者15名中5名が、2年生回答者4名全員が「満足していない」と回答しているが、一方で3年生7名中6名が「満足している」と回答している。つまり、高学年より低学年の満足度が低い結果であり、特に2023年度新メンバーが急増したことにより、後輩への対応や指導体制が十分ではなかったことが影響していると推測される。また、「満足していない」と回答している人の多くが「活動における困りごと・大変なこと」に回答しているため、これらを改善していくことで活動の満足度を高めるよう努めなければならないと考えられる。

表6 活動の満足度

項目	2022 年度	2023 年度
非常に満足している	6 名 35.3%	7 名 26.9%
まあまあ満足している	8 名 47.0%	9 名 34.6%
どちらともいえない	2 名 11.8%	5 名 19.2%
あまり満足していない	1 名 5.9%	3 名 11.5%
ほとんど満足していない	0 名 0.0%	2 名 7.7%

(4) 活動をとおして学んだこと

活動をとおして学んだことを表7に示す。2年間共通して回答が多かった項目は、「協調性・達成感・責任感」「子ども目線で考える姿勢・かかわり方」であり、仲間と協力して一つの劇を作り上げることの楽しさや大変さを学び、それを成し遂げることによって達成感を味わっていることがうかがえる。また、子どもから見たらどう思うのか、どうすれば子どもが楽しめるのかなど、子ども目線で考える力が身についていくと考えていることがうかがえる。そ

表5 活動に参加する理由（主な活動目的）

項目	2022 年度	2023 年度
表現力（言語、身体、音楽、造形）を身につけるため	5 名 29.4%	5 名 19.2%
保育者・教師に求められる実践力を身につけるため	4 名 23.5%	9 名 34.6%
子どもや保護者と直接かかわる機会を持つため	3 名 17.6%	6 名 23.1%
人間関係・視野を広げるため（先輩、他学科生とかかわるため）	2 名 11.8%	2 名 7.7%
協調性やリーダーシップを身につけるため	2 名 11.8%	1 名 3.8%
劇を作り、公演することで地域の子育て支援に貢献するため	1 名 5.9%	1 名 3.8%
その他	0 名 0.0%	2 名 7.7%

表7 活動をととして学んだこと

カテゴリー	2022 年度		2023 年度	
	内容	件数	内容	件数
表現力・伝え方	・声の大きさだけでなく、間の取り方や表情、身体の動き ・子どもたちへの伝え方 ・子どもに伝わりやすい言葉、わかりやすい表現の方法	3	・表現力、演技力 ・子どもの年齢に合わせた表現の仕方 ・子どもの反応を間近で見ながら劇をする楽しさ ・伝えることの難しさ、など	10
子ども目線で考える姿勢・かかわり方	・子どもから見たらどう思うのか、どうすれば子どもが楽しめるのかなどを子どもの目線で考える力が身についた、など	4	・子どもの目線で物事を考えること ・子どもとの接し方・かかわり方 ・子どもに合わせた言い方や動きをすることの大切さ ・見る側に立った視点で劇を作り上げることの大切さ、など。	9
協調性・達成感・責任感	・皆で一つの劇を作り上げることの楽しさや大変さ ・協力しながらものを作ったり、反省点や良かった点を共有したりすることで良い劇が完成できる ・仲間と切磋琢磨 ・周りを見て自分に何ができるか考える力、など	7	・周りを見て自分が何をすべきなのか考える力 ・仲間と協力して一つのことを成し遂げることの楽しさ・大変さ、達成感 ・人を頼る力、人と協力する力 ・組織での活動やチームワークを経験として学ぶことができた、など	10
実践力・行動力	・行動する力	1	・実践する力	1
人間関係の築き方	・先輩や仲間とのコミュニケーション ・意見の出し合い、など	3	・情報共有だけでなく、コミュニケーションを取ることの大切さ ・自分以外の考えを受け入れる力 ・先輩とのかかわり方	3

の他、「表現力・伝え方」「人間関係の築き方」などを学んでいることがわかる。

(5) 変わったこと・成長したこと

活動をととして変わったこと・成長したことを表8に示す。劇団くれよんの活動をととして、実際に変わったこと、成長したと感じたことを尋ねると、2年間共通して回答が多かった項目は「協調性、責任感を持てるようになった」「子ども目線に立って考える、かかわるようになった」であり、これらは学んだことでも多かった項目であり、ただ学んだだけではなく、実際に自分が変わったと感じていることがうかがえる。次に「人前に立つ、人前で話せるようになった」「人間関係・コミュニケーション力の向上」であるが、人前に立つことに苦手意識を持っていた人が人前で話すことができるようになったり、人とよくかかわれるようになったり、交友関係が広がったり、多くの人とコミュニケーションを

取れるようになったりするなど、人間関係やコミュニケーションの面で成長した様子が見える。なお、これらのメンバーの成長こそがボランティア活動の最も重要な教育的効果であるといえる。

(6) 将来どう生かせるか

活動をととして学んだことを将来どう生かせるかを表9に示す。劇団くれよんの活動をととして学んだことを将来、保育者や教師になったときにどのように生かせるのかを把握することもボランティア活動の教育的効果を検討するために重要である。2年間共通して回答が多かった項目は「子どもとのコミュニケーション・かかわりに生かせる」「制作活動や劇遊びに生かせる」「授業・保育の展開に生かせる」である。実際に保育者や教師として子どもとかわる際に役立つことはもちろん、劇団活動をととして磨いた制作スキルや演技力などは、実際に現場での制作活動や劇遊びに大いに役立つと考えられ

表8 変わったこと・成長したこと

カテゴリー	2022 年度		2023 年度	
	内容	件数	内容	件数
表現力の向上	・表現力が向上した ・裁縫や制作が得意になった、など	3	・子どもの年齢に合わせて表現や対応を変えられるようになった ・全身で表現することができるようになった ・子ども前に出た時の表情、絵本の読み聞かせや手遊び時の表現力が向上した、など	4
子ども目線に立って考える、かかわるようになった	・どうすれば子どもの想像力を掻き立てて理解してもらえるかという視点を持てるようになった ・子どもへの伝え方を工夫できるようになった、など	5	・子どものためにどうしたらいい劇になるかを考えられるようになった ・子どもの気持ち（心）を掴めるようになった ・子どもたちとかかわる機会が増えて接し方が以前より良くなった ・子どもと話せるようになった、など	7
協調性、責任感を持てるようになった	・助け合いができるようになった ・劇団の一員であるという自覚を持てるようになり、責任感が強くなった ・向きに考える・行動するようになった ・物事に挑戦しようと思うようになり、それを実際に行うことができるようになった、など	7	・協調性が高まった ・色々な人の意見をまとめ、一つの目的につなげるスキルが身についた ・グループを引っ張っていく責任感が身についた ・協力することがよりできるようになった。など	7
人前に立つ、人前で話せるようになった	・人前に立つことが苦手であったが、恥ずかしさが少なくなり、話せるようになった ・発言や演技、特にグループワークに積極的に参加できるようになった、など	6	・人前に出ることが苦手であったが、役者をとおして克服できた ・人前で何かをする時に緊張しなくなった ・人前で話すこと・演技をすることに自信を持てるようになった、など	6
人間関係・コミュニケーション力の向上	・どの意見も否定をしないで受け止めるようになった ・全員の意見を反映できる方法を考えようとする意識を持つようになった ・人の良いところを見つけて褒めることを意識するようになった ・人を見る目や目的に対しての見方が変わった	4	・人とよく関われるようになった ・コミュニケーション能力が身についた ・交友関係が広がり、学科を問わず話せる人が増えた ・多くの人とコミュニケーションを取れるようになった、など	8

る。また、ロールプレイの見本であったり、国語の音読であったり、子どもの年齢などに合わせた活動を考えることなど、授業や保育の展開にも生かせるといえる。その他、同僚とのかかわりや、人間関係や保護者とのコミュニケーション、前向きな姿勢や見通しを立てることに生かせるという意見があり、保育者や教師としての子どもとのかかわりに限らず、社会人として活躍していくために必要な資質や能力を備えることまで良い影響を与えることがうかがえる。これらもボランティア活動の重要な教育的効果であるといえよう。

(7) 挑戦してみたい活動

挑戦してみたい活動を表10に示す。2年間共通して回答が多かった項目は「活動範囲の拡大・質の向上」「幼児と児童用の劇を分ける・演目を増やす」であり、今までやったことのない演出（歌や楽器を使った劇、即興劇、子どもを巻き込むなど）をしてみたい、劇の質を上げたいと考えていることがうかがえる。また、もっと対象を絞って幼児向けの劇、児童向けの劇など子どもの年齢に特化した劇を作ったり、班を分けて同時に2つの劇を作ったりするなど、もっと自分たちの専門性を出し、演目を増やし

表9 将来どう生かせるか

カテゴリー	2022 年度		2023 年度	
	内容	件数	内容	件数
子どもとのコミュニケーション・ かかわりに生かせる	・子どもだったらどう考えるのか、より子どもの目線で物事を考えられる ・子どもの良い所を見つけ、認めることで自己肯定感を伸ばすことができる、など	5	・子どもと接する時の態度、かかわり方、コミュニケーションに生かせる ・子ども目線で物事を判断することができる ・自分がどう動くことで子どもがどう喜ぶかがわかる、など	12
授業・保育の展開に 生かせる	・生徒に楽しくてわかりやすい授業展開ができる ・日々の保育の中で子どもの姿を予想して対応することができる ・実際に子どもを教える際に役立つ、など	4	・ロールプレイの見本であったり、国語の音読であったり、何かを伝える際に生かせる ・子どもの年齢などに合わせた活動を考えることに生かせる、など	5
制作活動や劇遊びに 生かせる	・自分の中でどのように作れば良いのかを考えることができる ・壁面制作や裁縫をする時にスムーズに制作することができる ・ハサミやボンドの使い方など、制作に関することを子どもに教えられる、など	7	・壁面創作、縫い物、子どもに楽しんでもらうための制作物を作る際に生かせる ・園での劇づくりに生かせる、など	5
同僚とのかかわりに 生かせる	・周りの先生とのかかわり、つながり、コミュニケーションに生かせる	1	・周りの保育者とのかかわりを持つ際に生かせる ・一緒に働く教員とコミュニケーションをとる際に役立てる、など	3
人間関係や保護者との コミュニケーションに 生かせる	・同世代とかかわる際に役立つ ・人とかかわる際や仕事をする際に、相手の立場になって考えることができる、自分の意見をいえる ・保護者とのコミュニケーションが取りやすくなる、など	4	・保護者に子どもの状態を詳しく伝えられるようになる、保護者とコミュニケーションをとる際に生かせる ・人の気持ちを考えた発言や人数が多いグループをまとめることができる、など	3
前向きな姿勢・ 見通しを立てる	・様々なことに積極的になれ、生活も豊かになる ・計画性を持って効率的に物事を進めることに生かせる ・目的に対して捉える見方やその過程を重視することができる ・見通しをもって色々なことに取り組むことができる	4	—	0

て新しい劇に挑戦してみたいと考えていることがうかがえる。これらの結果をメンバーと共有し、次年度以降の活動に反映できるように検討していくことが重要であると考えられる。

(8) 困ったこと、大変なこと

困ったこと、大変なことを表11に示す。劇団くれよんは、発足以来8年間20名前後のメンバーで活動を行ってきたが、2023年度に急に30名を超える

まで規模が大きくなり、大勢の人を統率できるリーダーシップや運営体制が整っていないまま活動が始まった。そのため、どうすればいいのかわからないなど、戸惑いを感じているという声も聞こえるようになったため、その現状を把握するために、2023年度のアンケートに、困ったこと、大変なことを尋ねる設問を新しく設けた。よって、2022年度のデータはなく、2023年度の結果のみになっている。最も多かった回答は「活動参加に対するモチベーショ

表 10 挑戦してみたい活動

カテゴリー	2022 年度		2023 年度	
	内容	件数	内容	件数
活動範囲の拡大・質の向上	・歌や楽器を使った劇の公演 ・今までやっていない役割（役者）に挑戦したい ・劇自体のクオリティを上げられるようにしたい ・即興劇を SNS のショートムービーで出していく ・プロの劇団の劇の鑑賞、など	7	・劇の演出、もっと声を張れるようにする、衣装も自分たちで作る ・役者や裏方の人員を増やして、より規模感の大きい劇を作りたい ・劇の中でもっと子どもを巻き込めるような演出に挑戦してみたい	4
新しい公演先の開拓	・新規の公演先を積極的に開拓する ・小学校での公演をしたい、など	3	・幼稚園や保育園での公演	2
幼児と児童用の劇を分ける・演目を増やす	・完全小学生向けの劇の制作 ・劇団内での演目の見せ合い、より多くの題材を用いて表現力にもっと磨きをかけていきたい、など	3	・演目を増やし、年2つ以上の劇を作る ・幼児用、児童用に分けて行ってみたい、など	3
他大学や子どもとの連携	・他大学（愛知県内の保育者養成校等）と連携する ・子ども（小学生）との共同制作・連携	3	—	0

表 11 困ったこと、大変なこと※

カテゴリー	2023 年度	
	内容	件数
活動参加に対するモチベーションの差	・一部メンバーの活動への参加度があまりにも低い ・参加意欲の差があり、周りのことよりも自分を優先する人がいる、など	4
役割分担・何をすればいいのかわからない	・人数が多い分、何も役割のない人が生まれ、不必要な私語やふざけに発展することがある ・上級生が何もかも主導で動いてしまい、どのように動けばいいのかわからず困った、など	4
情報共有・コミュニケーションの難しさ	・先輩に意見を伝えづらく、伝えても意見が通らない、下級生に必要な情報が共有されていないことがある、など	3
人間関係が難しい	・最初（入団直後）は、先輩との人間関係が難しかった ・特定の人と相性が合わない	2

※ 2023 年度に追加した新規設問であるため、2022 年度のデータはない。

ンの差」「役割分担・何をすればいいのかわからない」であり、次に「情報共有・コミュニケーションの難しさ」の順である。

人数が増えたことで、登場人物が多い劇、場面の変化が多い劇など、作れる劇の幅が広がったり、メンバー一人ひとりの負担が減ったりするなど、メリットもあるが、その反面、表11のような問題も発生しており、なかでも深刻な問題は、周りよりも自分の都合を優先して頻繁に欠席・遅刻をして活動

にあまり参加しない人がいること、参加しても私語などで盛り上がりすぎて活動があまり進まないときがあり、その結果、全体のモチベーションの低下につながってしまうことである。組織が大きくなると必然的に発生する問題かもしれないが、積極的に参加しているメンバーまで意欲が下がるような状況は決してあってはいけない。メンバー全員が楽しく活動を持続するためには、これらの困ったこと、大変なことを至急解決しなければならないと考えられる。

表 12 改善すべき課題

カテゴリー	2022 年度		2023 年度	
	内容	件数	内容	件数
活動参加に対するモチベーションの向上	—	0	・活動している時はメンバー全員が積極的に参加すること ・活動日はなるべく休みを減らし、士気が下がらないよう努力する ・誰かがやってくれるだろうと人任せにしない、など	7
情報共有・意見交換の改善	・いつも直前まで公演等の情報が伝わらないので、事柄が決まっていなかったり、迷っていたりするなら、それも含めて情報共有をしてほしい	1	・話し合いで出た意見が否定されたり、反映されなかったりすることがある ・報連相の強化 ・反省会に長い時間を費やしているのにもかかわらず、その反省が生かされていない ・必要な情報を必要な時にすぐに使えるように、グループ LINE の情報管理、使い方の改善を図る必要がある、など	4
活動の運営・管理の改善	・スケジュール管理能力の改善 ・見通しをもって動くこと ・先輩から後輩への今までのやり方等の受け継ぎをもう少し詳細にやってほしい	3	・年間の活動スケジュールを事前に決めておく、見通しが立てやすく活動にもメリハリが付いてよい ・活動中のスマートフォン使用のルールを明確にすべきである、など	3
役割分担を明確に	—	0	・制作するものがない時に、役者の稽古を見るだけの時間が続いている状態が何回かあったので、制作担当の人もしっかりとかわれるようにしてほしい	1
劇の質の向上	—	0	・劇で使う道具や幕のクオリティを上げ、見る人がより世界観に入りやすい劇を作り上げる	1
所属学科の偏りを解消する	・どうしても学科の偏りがある。現代教育学科にとっても魅力が伝わるようになってほしい	1	—	0

(9) 改善すべき課題

改善すべき課題を表12に示す。改善すべき課題については年度別の特色があるため、それぞれ見ていく。まず、2022年度は「活動の運営・管理の改善」に関する意見が挙がっており、スケジュールの管理や仕事の引継ぎの改善を求めている。2023年度は「活動参加に対するモチベーションの向上」が最も多く、次に「情報共有・意見交換の改善」を求める意見が挙がっている。活動にはメンバー全員が積極的に参加することと、なるべく休みを減らし、士気が下がらないよう努力する必要がある、話し合いで出た意見が否定されたり、反映されなかったりすることがないように意見交換の改善を図る必要が

ある。また、「報告」「連絡」「相談」の強化や情報管理体制を改善し、円滑な情報共有ができるように努めることによって、より協力しやすくなり、メンバー一人ひとりの活動の満足度を高めることにつながると思われる。

IV. まとめ

本稿では、2022～2023年度の劇団くれよんの活動を紹介し、活動をとおして得られた教育的効果および今後の課題について検討した。その結果、まず、劇団くれよんのボランティア活動の教育的効果について、一つ目は、子どもとのかかわりに欠かせない、

子ども目線で考える姿勢や表現力・伝え方を体験的に学び、それを実践できるように身につけていることである。二つ目は、社会人として人や組織とかかわる際に欠かせない、協調性・行動力、人間関係の築き方を学び、経験していることである。特に、人前に立つことが苦手という意識を克服できるようになり、コミュニケーション力を高めていることが最も大きな成長であるといえる。三つ目は、劇団くれよんの活動をととして学んだことを将来、保育者や教師になったときにどのように生かせるのか、具体的なイメージを持てるようになり、それが現在の活動の原動力にもなることに大きな意味があると考えられる。以上のことから劇団くれよんの活動は、保育者や教師を目指す学生にとって十分な教育的効果があり、メンバーの学び・成長に確実につながっているといえる。最後に、今後の課題について述べる。メンバーが増え、できる活動の範囲も広がり、良くなったことも多いが、一方では参加意欲の差、役割分担・情報共有の不足などの問題も発生し、活動に対する満足度が例年より下がる結果となった。より良い活動を行うために、情報共有・意見交換の改善、

役割分担の明確化、運営・管理体制の改善を行う必要があり、これらによってメンバーのモチベーションの向上を図っていくことが今後の課題であると考えられる。

注

- (1) 公演の様子は、写真を掲載することに対してメンバー全員の承諾を得た上で載せた。

文献

- 中央教育審議会（2006）「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」(https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1212707.htm、2024年2月7日閲覧)
- 中央教育審議会（2015）「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）」(https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/01/13/1365896_01.pdf、2024年2月7日閲覧)

受付日 2024年3月15日

受理日 2024年5月17日